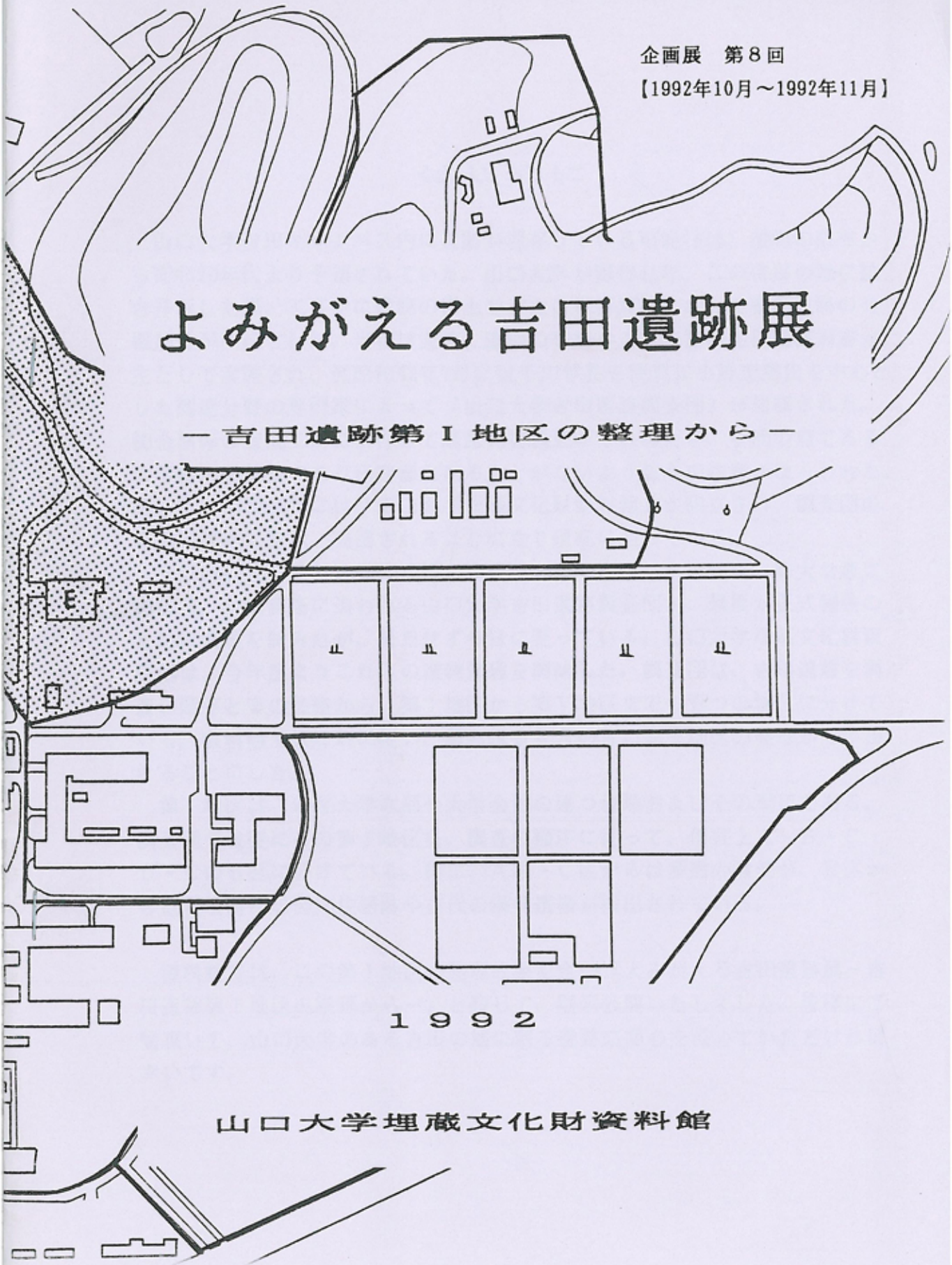
企画展　第８回
【1992年10月～1992年11月】

よみがえる吉田遺跡展

－吉田遺跡第Ｉ地区の整理から－



１９９２

山口大学埋蔵文化財資料館

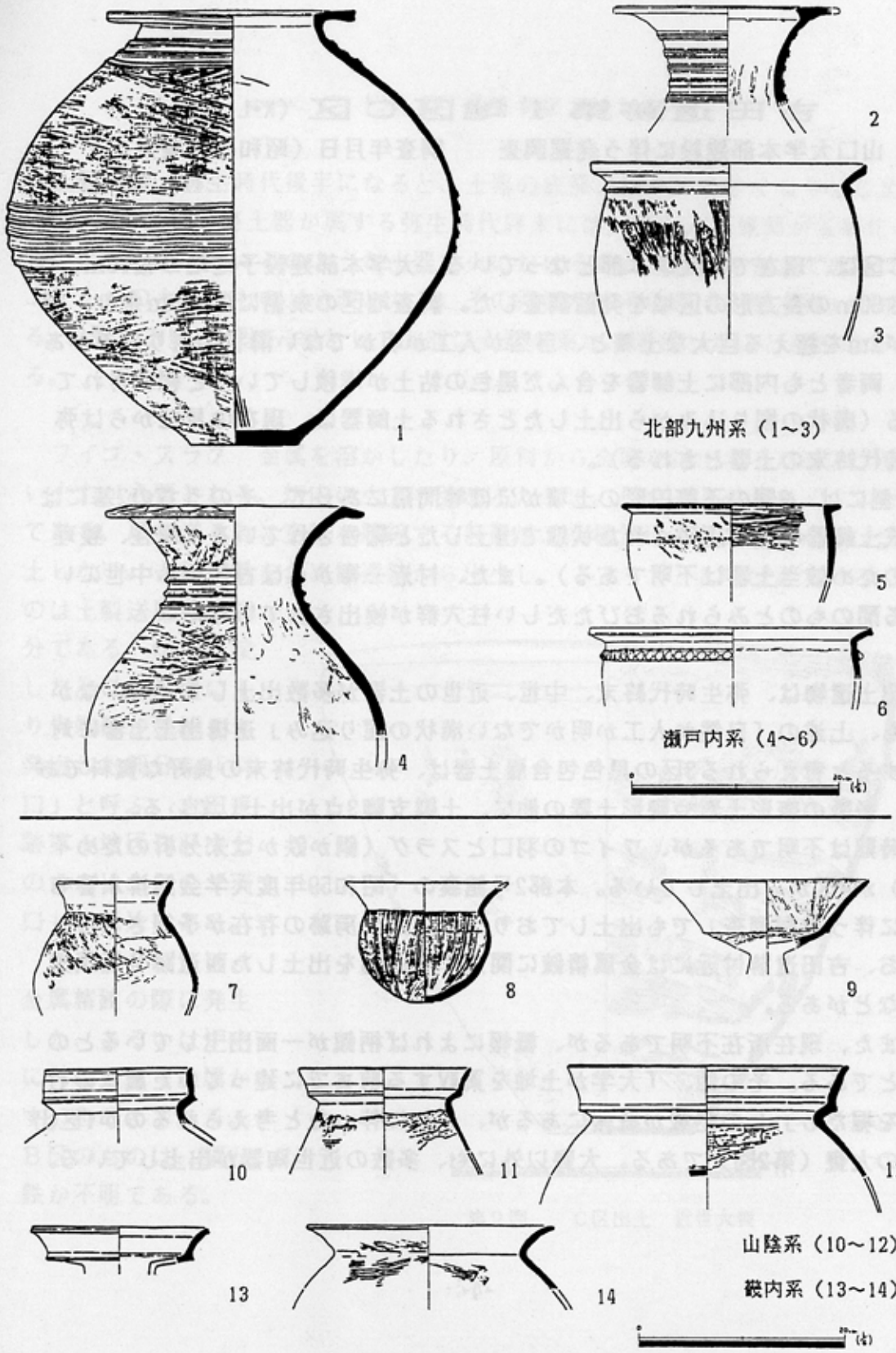
はじめに

山口大学吉田キャンパス内に遺跡が埋存している可能性は、遺物の散布から昭和20年代より予想されていた。山口大学が昭和41年、この吉田の地に統合移転した際、工事中に遺物の出土をみたことが契機となって構内遺跡の発掘調査が開始された。当初は遺構、遺物の有無および遺跡の範囲確認調査が主として実施され、翌昭和42年7月には市川学長を団長に小野忠熙氏を中心とした関連分野の専門家によって「山口大学吉田遺跡調査団」が組織された。統合移転の造成工事に併行して緊急発掘調査が行われたが、学問の府である大学構内の調査であり研究面も怠ることがないよう細心の注意がはらわれた。そして、昭和53年には「山口大学埋蔵文化財資料館」が設立され、調査団の業務は着実に継承、発展されることになり現在に至っている。

大学の統合移転という大規模な造成によって出土した遺物は、膨大な量にのぼる。発掘調査に追われる山口大学吉田遺跡調査団が、幾度か正式報告のために整理を試みたが、果たせず今日に至っている。山口大学埋蔵文化財資料館は、今年度よりこれらの遺物整理を開始した。調査団は、吉田遺跡を調査の順序とその性格から、第Ⅰ地区から第Ⅴ地区までの五つの地区に分けている。資料館ではこれに従い、最も調査年月の古い第Ⅰ地区の整理から手掛けることにした。

第Ⅰ地区は、現在大学本部や大学会館の建つ台地およびその周辺である。調査団では更にこの第Ⅰ地区を、調査の順序に従って、便宜上Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅの５区に分けている。特に、Ａ区・Ｃ区からは多数の遺物が、Ｅ区からは古墳時代の竪穴住居跡や古代の溝状遺構が検出されている。

資料館では、この第Ⅰ地区の整理成果を今回『よみがえる吉田遺跡展－吉田遺跡第Ⅰ地区の整理から－』と題して、展示公開いたしました。皆様にご覧頂いて、山口大学のある吉田の地に眠る遺跡に関心を深めていただければ幸いです。



第1図　A区出土土器

吉田遺跡第Ⅰ地区A区（L・M・N-15）

道路拡幅に伴う発掘調査　　調査年月日（昭和41年7月7日～20日）

吉田遺跡第Ⅰ地区B区（L・M・N-15）

道路側溝掘削に伴う発掘調査　　調査年月日（昭和41年10月15日～30日）

A区は、現在では埋蔵文化財資料館前の本部事務局をつなぐ構内循環道となっている。構内循環道拡幅のため削り取られる幅1m、長さ5mの範囲の崖面と、その全面に広がる低湿地の調査を行った。台地の末端が南に低まる傾斜面では、弥生時代中期の土器を充填した不整形のピットが検出されている。

B区は、A区の北東側に側溝が設けられるため、工事で削り取られる幅2m長さ10mの範囲を調査した。柱穴群を検出している。

A区からは、多量の弥生時代中期後半の土器と、古墳時代前期前半の土器が出土している。

A区出土の中期弥生土器　（第1図　1～6）

北部九州系（1～3）　無頸壺（1）、広口壺（2）、甕（3）などが出土している。壺の口縁部が水平方向に張り出し、突帯がM字状であるなどの北部九州的特徴を有している。

瀬戸内系（4～6）　　広口壺（4）、甕（5,6）などが出土している。壺の口縁部が下に垂れ下がることや、甕の突帯上を刻むなどの瀬戸内的特徴を有している。

A区出土の古墳時代前期前半の土器　（第1図　7～14）

受け口状になる口縁部が特徴的な山陰系の壺（10）、甕（11,12）などが出土している。一方では、受け口でも口縁部が大きく開き頸部が細い二重口縁壺（13）、外面にタタキ調整をもつ甕（14）といった、畿内的特徴をもった土器も出土している。

古田遺跡第Ⅰ地区C区（K･L-14）

山口大学本部建設に伴う発掘調査　　調査年月日（昭和42年度夏）

C区は、現在では大学本部となっている。大学本部建設予定地の幅10m、長さ60mの長方形の区域を発掘調査した。調査地区の東側には径3m余り、深さが2mを超える巨大な土壙と、自然か人工か明かでない溝状の掘り込みがあり、両者とも内部に土師器を含んだ黒色の粘土が堆積していたと報告されている（溝状の掘り込みから出土したとされる土師器は、現在の見地からは弥生時代終末の土器とされる）。

西側には、3個の不整円形の土壙がほぼ等間隔にあって、そのうちの2基には古式土師器の壺が圧砕された状態で出土したと報告されている（現在、整理中のため該当土器は不明である）。また、付近一帯からは古代から中世にいたる間のものとみられるおびただしい柱穴群が検出されている。

出土遺物は、弥生時代終末、中世、近世の土器が多数出土している。なかでも、上述の「自然か人工か明かでない溝状の掘り込み」遺構出土土器に対応すると考えられる3区の黒色包含層土器は、弥生時代終末の良好な資料である。多数の壺形土器や甕形土器の他に、土製支脚3点が出土している。

時期は不明であるが、フイゴの羽口とスラグ（銅か鉄かは未分析のため不明）が4区から出土している。本部2号館裏の「昭和59年度大学会館排水管布設に伴う発掘調査」でも出土しており、近辺に工房跡の存在が予想される。なお、古田遺跡付近には金属精錬に関連する遺物を出土した西遺跡や黒川遺跡などがある。

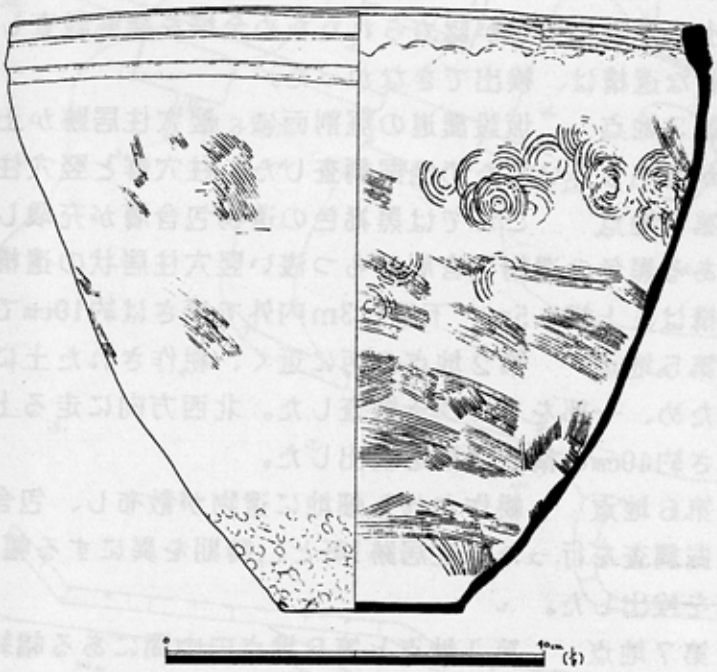
また、現在所在不明であるが、概報によれば柄鏡が一面出土しているとのことである。その他、「大学が土地を買収する前までに建っていた農家の石垣を堀だし」との記載が概報にあるが、これに伴ったと考えられるのが1区出土の大甕（第2図）である。大甕以外にも、多数の近世陶器が出土している。

＝ C区用語解説 ＝

土製支脚　弥生時代後半になると、土器の底部は徐々に小さくなりはじめ、B区3区黒色包含層土器が属する弥生時代終末には、ほとんど底部が尖底化あるいは丸底化する。このような土器を火にかける場合、土器を支えておく「ごとく」のようなものが必要となる。その役目をするのが「土製支脚」である。2個あるいは3個を1組として上部に土器を乗せ、煮沸したことが想定できる。

フイゴ・スラグ　金属を溶かしたり、原料から金属を抽出するためには強い火力が必要となる。炉内の火力を強めるために、風を送る道具が「フイゴ」である。風を送る為に空気を圧縮する装置は、有機質のために遺跡からは出土しない。吉田遺跡を含め諸遺跡から出土し、「フイゴ」と呼ばれているものは土製送風管の部分である。炉内に接した為に、高温により先端部が融解し、発泡した部分を「羽口」と呼ぶ。吉田遺跡第Ⅰ地区B区出土のものは、この「羽口」の断片である。

「スラグ」とは、金属精錬の際に発生した、あるいは炉内に付着した「金属かす」のことである。B区のものは、銅か鉄か不明である。



第２図　　C区出土　近世大甕

吉田遺跡第Ⅰ地区D区（K・L・M・N-13）

農学部附属農場飼料園開墾に伴う発掘調査

調査年月日（昭和46年4月12日～25日）

D区は、現在では大学本部裏の家畜飼料園、あるいは大学会館の一部敷地となっている。この地区に仮設の排水溝が長く掘られ、飼料園にとうもろこしを播種するため耕作した際、弥生土器や古式土師器の破片を含む包含層が、5ヶ所で掘り出された。この5ヶ所とその周辺を合わせた計7ヶ所が調査された。

第1地点　仮設の農道の側溝として掘られた排水溝に、遺物包含層が露出していた為、トレンチを設けて発掘調査した。南北方向に走る東西の上幅約17m、下幅13.5m、深さ1m～1.3m以上の溝状遺構が検出された。

第2地点　第1地点から仮設農道を挟んだ北東側の飼料園で、耕作された土に遺物の包含が認められたため全域を発掘調査した。削平が著しいため顕著な遺構は、検出できなかった。

第3地点　仮設農道の堀割面に、竪穴住居跡か土壙とみられる遺構の一部が露出していたため発掘調査した。柱穴群と竪穴住居跡や土壙を検出した。

第4地点　ここでは黒褐色の遺物包含層が充塡した溝状遺構と、その上にある黒色の遺物包含層をもつ浅い竪穴住居状の遺構が重複していた。溝状遺構は、上幅3.5m、下幅1.3m内外で深さは約10cmである。

第5地点　第2地点の西に近く、耕作された土に遺物の包含が認められたため、一部をトレンチ調査した。北西方向に走る上幅約1m、下幅約50cm、深さ約40cmの溝状遺構を検出した。

第6地点　耕作された畑地に遺物が散布し、包含層が露出していたので発掘調査を行った。住居跡1軒と、時期を異にする幅約2m、深さ60cm溝状遺構を検出した。

第7地点　第4地点と第6地点の中間にある幅約3m、深さ40cmの溝状遺構で、この溝は両地に連なるものと考えられる。

吉田遺跡第Ⅰ地区E区（N・0-15）

第二学生食堂建設に伴う発掘調査

調査年月日（昭和46年10月16日～11月21日）

E区は、現在では第二学生食堂となっている。第二学生食堂の建設に先がけ約900㎡を調査した。弥生時代中期の薄い遺物包含層や、古墳時代の方形の竪穴住居跡6軒と柱穴群、古代の柵列をもった溝状遺構、土壙などが検出されている。

1号住居跡　平面プランは、一辺3.2mの方形を呈するが削平のため南半部を失っている。

2号住居跡　平面プランは、一辺4mの方形である。東壁の中央部近くを直径約30cmの半円形に堀り込んだ造り付けのカマドが設けてある。

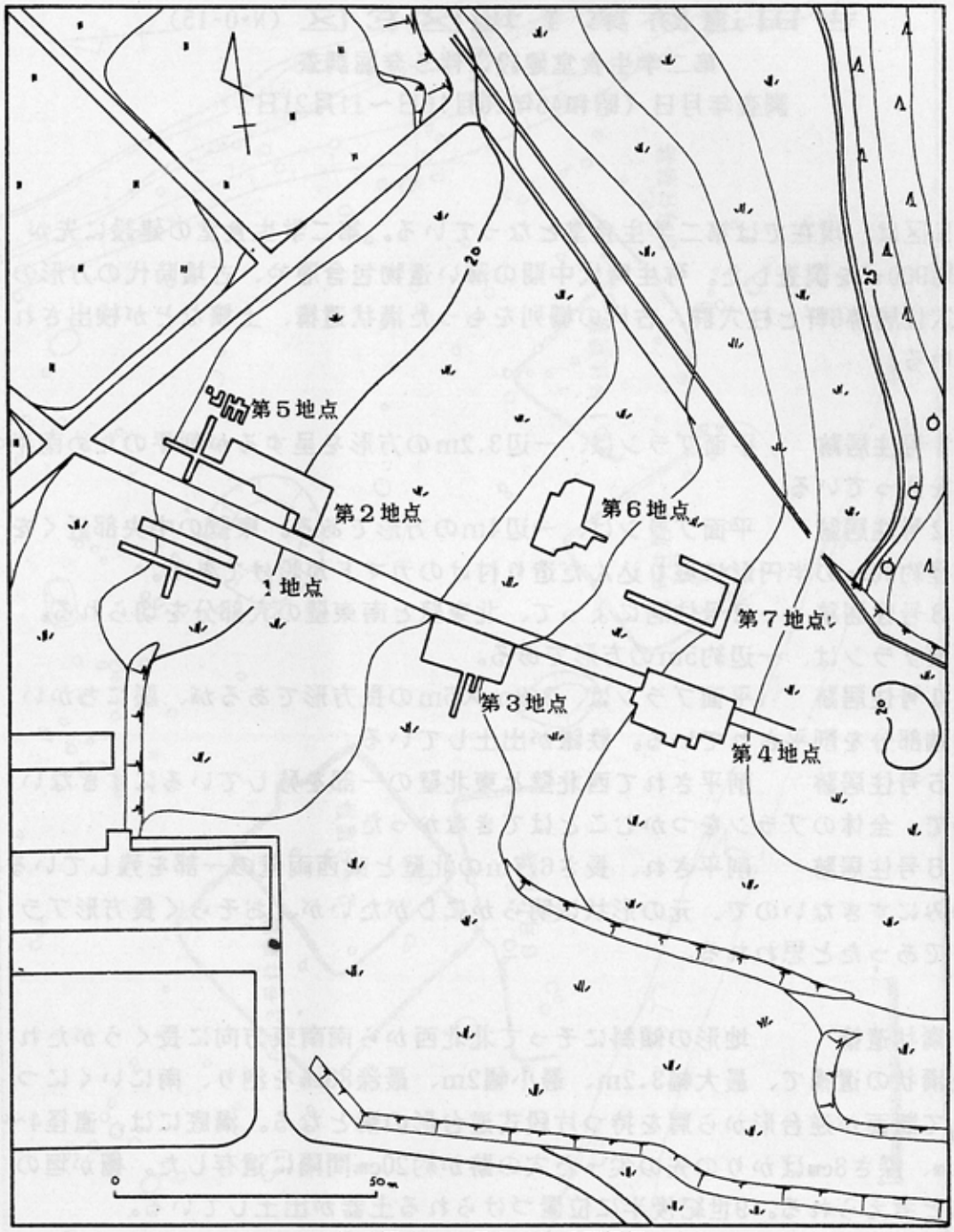
3号住居跡　2号住居によって、北東壁と南東壁の大部分を切られる。平面プランは、一辺約5mの方形である。

4号住居跡　平面プランは、3.8m×5mの長方形であるが、崖にちかい南端部分を削平されている。鉄鎌が出土している。

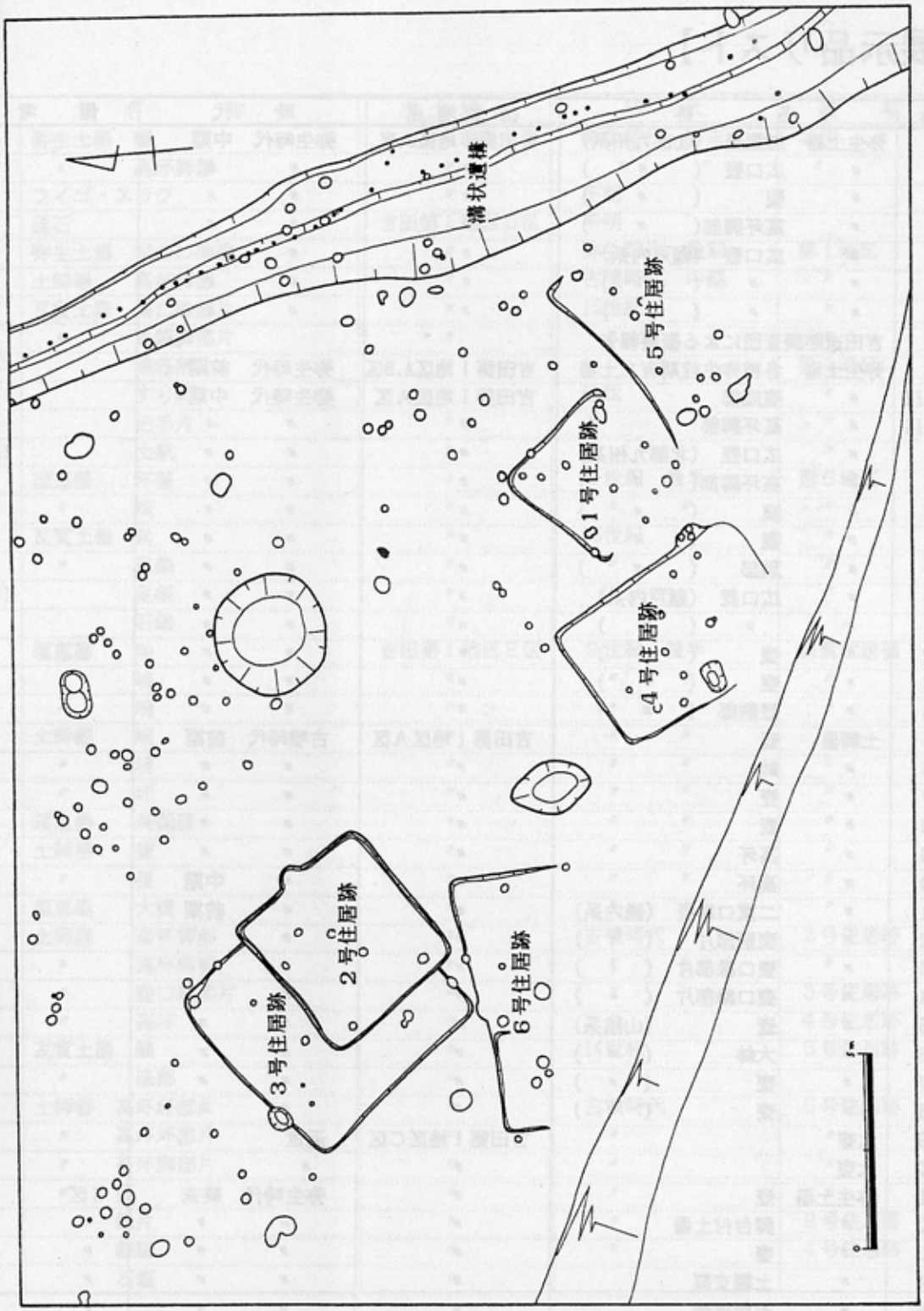
5号住居跡　削平されて西北壁と東北壁の一部を残しているにすぎないので、全体のプランをつかむことはできなかった。

6号住居跡　削平され、長さ6.7mの北壁と東西両壁の一部を残しているのみにすぎないので、元の形状は明らかにしがたいが、おそらく長方形プランであったと思われる。

溝状遺構　地形の傾斜にそって北北西から南南東方向に長くうがたれた溝状の遺構で、最大幅3.2m、最小幅2m、最深80cmを測り、南にいくにつれて断面が逆台形から肩を持つ片段式逆台形の溝となる。溝底には、直径4～6cm、深さ8cmばかりの先の尖った穴の跡が約20cm間隔に遺存した。柵か垣の跡と考えられる。9世紀後半に位置づけられる土器が出土している。



第３図　　Ｄ区トレンチ配置図



第４図　　Ｅ区遺構配置図

【展示品リスト】

展示No.	名　　称	出土地点	時　代	備　考
1	弥生土器　無頸壺　（北部九州系）	吉田第Ⅰ地区Ａ区	弥生時代　中期	
2	〃　広口壺　（　〃　）	〃	〃　〃	
3	〃　甕　（　〃　）	〃	〃　〃	
4	〃　高坏脚部（　〃　）	〃	〃　〃	
5	〃　広口壺　（瀬戸内系）	〃	〃　〃	
6	〃　〃　（　〃　）	〃	〃　〃	
7	〃　〃　（　〃　）	〃	〃　〃	
8	吉田遺跡調査団による概要報告			
9	弥生土器　各種弥生前期有文土器	吉田第Ⅰ地区A.B区	弥生時代　前期	
10~12	〃　甕底部	吉田第Ⅰ地区Ａ区	弥生時代　中期	
13.14	〃　高坏脚部	〃	〃　〃	
15	〃　広口壺　（北部九州系）	〃	〃　〃	
16	〃　高坏脚部（　〃　）	〃	〃　〃	
17	〃　甕　（　〃　）	〃	〃　〃	
18	〃　甕　（　〃　）	〃	〃　〃	
19	〃　胴部　（　〃　）	〃	〃　〃	
20	〃　広口壺　（瀬戸内系）	〃	〃　〃	
21	〃　〃　（　〃　）	〃	〃　〃	
22	〃　甕　（　〃　）	〃	〃　〃	
23	〃　甕　（　〃　）	〃	〃　〃	
24	〃　壺胴部　（　〃　）	〃	〃　〃	
25	土師器　壺	吉田第Ⅰ地区Ａ区	古墳時代　前期	
26	〃　鉢	〃	〃　〃	
27	〃　壺	〃	〃　〃	
28	〃　壺	〃	〃　〃	
29	〃　高坏	〃	〃　〃	
30	〃　高坏	〃	〃　中期	
31	〃　二重口縁壺　（畿内系）	〃	〃　前期	
32	〃　甕胴部片　（　〃　）	〃	〃　〃	
33	〃　甕口縁部片　（　〃　）	〃	〃　〃	
34	〃　甕口縁部片　（　〃　）	〃	〃　〃	
35	〃　壺　（山陰系）	〃	〃　〃	
36	〃　大鉢　（　〃　）	〃	〃　〃	
37	〃　甕　（　〃　）	〃	〃　〃	
38	〃　甕　（　〃　）	〃	〃　〃	
39	大甕	吉田第Ⅰ地区Ｃ区	近世	
40	大甕	〃	〃	
41	弥生土器　壺	〃	弥生時代　終末	３区
42	〃　脚台付土器	〃	〃　〃	〃
43	〃　甕	〃	〃　〃	〃
44	〃　土製支脚	〃	〃　〃	〃
45	〃　土製支脚	〃	〃　〃	〃
46	〃　土製支脚	〃	〃　〃	〃
47	〃　長頸壺	〃	〃　〃	〃
48	〃　甕	〃	〃　〃	〃

図No.	名　　称	出土地点	時　　代	備　　考
49	弥生土器　甕	吉田第Ⅰ地区C区	弥生時代　終末	3区
50	〃　高坏脚部	〃	〃　〃	〃
51	フイゴ・スラグ	〃	不明	
52	砥石	吉田第Ⅰ地区D区	不明	
53	弥生土器　複合口縁壺	〃	弥生時代　後期	第1地区
54	土師器　高坏脚部	〃	古墳時代　中期	〃
55	瓦質土器　鍋口縁部片	〃	15世紀	〃
56	〃　足鍋脚部片	〃	〃	〃
57	椀底部片	〃		第4地区
58	すり鉢	〃	近世	〃
59	把手片	〃	〃	〃
60.61	土瓶	〃	〃	〃
62	須恵器　坏蓋	〃	9世紀　後半	第6地区
63	〃　椀	〃	〃　〃	〃
64	瓦質土器　鍋	〃	15世紀	〃
65	〃　足鍋	〃	〃	〃
66~71	足鍋	〃	〃	〃
72	石鍋	〃		
73	須恵器　椀	吉田第Ⅰ地区E区	9世紀　後半	東溝状遺構
74	〃　椀	〃	〃　〃	〃
75	〃　椀	〃	〃　〃	〃
76	土師器　椀	〃	〃　〃	〃
77	〃　椀	〃	〃　〃	〃
78	〃　坏	〃	〃　〃	〃
79	須恵器　長頸壺	〃	〃　〃	〃
80	土師器　甕	〃	〃　〃	〃
81	〃　甕	〃	〃　〃	〃
82	須恵器　大甕	〃	〃　〃	〃
83	土師器　高坏脚部	〃	古墳時代	2号住居跡
84	〃　高坏脚部	〃	〃	〃
86	〃　壺口縁部片	〃	〃	3号住居跡
87	〃　高坏	〃	〃	4号住居跡
88	瓦質土器　鍋	〃	14世紀	5号住居跡
89	〃　底部	〃		
90	土師器　高坏坏部片	〃	古墳時代	6号住居跡
91	〃　高坏坏部片	〃	〃	〃
92	〃　高坏脚部片	〃	〃	〃
93	〃　甕	〃	〃	〃
94	鉄片	〃	〃	2号住居跡
95	鉄鏃	〃	〃	4号住居跡
96	石鏃	〃		